
voice

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

voice

【Nコード】

N2696P

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

声がする。わたしを案じる人たちの。わたしを取り合う人たちの。わたしのために泣く人の。わたしのために、語る人の。★外部サイト「みくり」掲載作品です。

姉さんの絶叫が聞こえた気がする。

——わたしは、轢かれたの？

——死ぬの？

体と頭を打っただけで済んだらしい。

——だけ、じゃないか。

一瞬もつと酷い状況を想像したから、体がどこも千切れていない分、それでもマシに思える。

「明日香……！」

「明日香、明日香！」

声がする。父さんと、母さん。

必死にわたしを呼んでいる。

当然のようで、貴重だ。二人が同じように案じ、同じように悲しめるのはわたしだけなのだから。

……貴重でも、当然だ。

気になるのは、それよりも。

「……俺はさ。こいつが気に食わなかったんだ」

「知ってるよ」

声がする。兄さんたち。

そう、こっちが聞きたかった。

「大人げないとは思うけど。……どっちかって言ったら、やっぱり、嫌いだ」

知ってるよ。

「わかってる。随分辛抱してるよね」

「……まだマシだしな」

父さんと母さんは再婚だ。兄さんたちの母親は亡くなっている。実の母親を覚えている上の兄と、覚えていない下の兄とでは、母さんやわたしに対する思いも違ってくるのだろう。下の方が、自然に優しい。上の方には、努力が窺える。

「けど、さ。死ぬかもしれないってなると。……やっぱ、な」

……殊勝じゃないの、兄さん。

「妹は妹だし。一緒に暮らしてきたわけだし」

妹は妹で、一緒に暮らしてきて、それでも気に食わないなんじゃなかったつけ。どうしたの、やけに物わかりがいいけど。

それともわたし、間違えてる？ 病室の中の気配と声の、どれが誰のものなのか。兄弟だけあって声は似てるし。

一人が近づいてきて、一人が場所を譲るように動いた。

「……死ぬ……かな？」

気弱な。

「死なないとしても、起きるかどうか」

こっちは冷静ね。

「……こいつが死んだら。あの二人、別れると思うか」
ま。

人の意識がないと思って。

「ないと思うな」

「だな」

でしょうね。

そういうことで別れるタイプじゃないわよ、父さんと母さんは。

「だよな」

繰り返す。それからしばし、沈黙。

「こいつが死んだって、得はない……な」

怖いな。でも、これなら兄さんらしい。

また少し、沈黙。

「さっさと起きろよ。入院費嵩む」

ますます兄さんらしい。こんなのばかり。

「死ぬなよ。……明日香」

……ん。

いい人、なのよね。兄さんたち。

声がする。誰だろう。

押し殺した啜り泣き。

「でも、思ってたより顔色いいんじゃない」

第二の声が慰める。ああ、姉さんたち。

泣いているのは、悲しいから？ それとも怖かったから？

……意地が悪いか。

事故は姉さんたちの前で起こった。あんな光景、見せるつもりじやなかったのに。

ドアが開いた。振り向く気配。

緊張が走る。あ、まさか。

「何しに来たんだよ」

「いけないの？ あたしたちにだって妹だわ」

険しい声に尖った声が食ってかかる。まずいな、兄さんたちだ。

姉さんたちとは仲が悪いのに。

姉さんたちの母親は、父さんの愛人だ。今も昔も。兄さんたちの母親が亡くなったときに、どうして後釜に入らなかったんだか。

「知ってるさ。だから明日香が会いに行っただろ」

……兄さん。きついよ、それは。

姉さんたちに会いに行つて、事故に遭つたのは事実だ。だからつて別に、突き飛ばされたとかいうわけじゃない。

そもそも会ってみたくなつたのは、兄さんたちが言うほど嫌な人たちなのかと疑ったからだ。姉さんたちが悪いなら、兄さんたちだって悪いんだからね。

「出てけよ」

兄さんってば。

ややあつて、立ち上がる気配。ちょっと、姉さんたち。引き下が

るの？

ドアが閉まる。……行っちゃった。やり合ってくれればよかったのに。

……。

兄さん。兄さんたち。何か言ってよ。

そばに来たのはわかってるのよ。見下ろしてるのもわかってるのよ。どんな顔をしてるかはわからないのよ。

「――明日香」

囁くように。

「おまえは、俺らの、妹だからな」

「わかってるよ」

応じる声。

「俺らの、妹だ」

……要するに。姉さんたちには、渡したくないのね。

前言撤回。いい人なのよね、っていうの、取り消す。大丈夫よ、嫌いにはならないから。

とりあえず、目が覚めたときに兄さんたちがやたら優しくなっても、驚かないことにしよう。死にかけておかげで和解に至るのは、割とベタな展開だし。

「明日香ちゃん……」

声がする。姉さん。

今日は一人で来たらしい。

「……明日香、ちゃん……」

そんなに切なく眩かないでよ。姉さんは悪くないし、わたしだって悪くないのに。

っていうか、大体、わたしに思い入れなんてないはずでしょうに。ドアが開いた。振り向く気配。

「……一人、か」

ドアが閉まる。兄さんも一人らしい。

沈黙。……気まずいじゃないの。

「姉さんたち、前から明日香と会ってた？」

やっと再び、兄さんが口を利いた。

「あのときが初めて……知っては、いたけど」

「そ、か」

呟き声に思いなしか、安堵のような満足のような響きがあった。ほっとするところなのね。わたしと姉さんたちに付き合いがなかったっていうのは。

「この前は悪かったよ。言いすぎた」

いつになく優しいことを言う。言いすぎたのはあなたじゃなかったと思うんだけど。また聞き間違えたかしら？

「こっちこそ……妹だから、なんて。そのせいでこうなったのに……」

それも、あなたじゃなかったような。

「行ったのは明日香の勝手だろ」

「それでもやっぱり、わたしたちのせいだわ……あなたたちから明日香ちゃんを取り上げることになるかもしれない……」

ただでさえか細い声が、震えて消え入りそうだ。

……あの。心配してくれるのはありがたいんだけど。できれば運転手を責めてほしいんだけど、正直。

訪ねていったわたしたちの、興味を引いた姉さんたちだの、その原因の兄さんたちだの、言い出したらきりがないし。結局誰が悪いのか曖昧になるし。

「不吉なこと言うなら帰ってくれる」

兄さんが急にそっけなくなった。帰れ、じゃないのね、でも。

「誰の子だと思ってるの、明日香を」

父さんと、母さん。うん、殺しても死にそうにない。

煙に巻かれたのか力づけられたのか、しゃくり上げる気配がやんだ。何だか和解したみたい。いいことだ。和解するべきなのはこの二人じゃないような気はするけど。

ドアが開いた。振り向く気配。
ドアが閉まる。

「脅かすなよ。いるなんて思わなかった」

声がする。兄さん。

相手は、誰だろう。

沈黙が続く。睨み合っているのか、一方が一方を見守っているのか、静かな緊張。

「死ねばよかったのよ」

……こっちの、姉さん。

父さんの先妻は亡くなったのだけれど、母さんと先夫とは離婚している。子供は父親に引き取られた。

自分の子供は置いていったのに、連れ子のいる父さんと再婚して、わたしを産んで。母さんやわたしを姉さんが憎むのも、わかると言えはわかる。

「あなたたちだって、気に食わないんでしょう？」

「だからって、殺すなよ。捕まるぞ」

ちよつと、兄さん。そこじゃないでしょ。

「母さんは辛いでしょねえ」

姉さんの唇の片端が、吊り上がるのが目に見えるようだ。姉さんがわたしを殺して捕まったら、そりゃあ母さんは堪らないでしょうよ。

……兄さん。なんで黙ってるのよ。

「駄目だ。世間の注目が集まる」

かなり経って口にした。……ちよつと。

「いいじゃないの、騒ぎ立ててもらえば」

「嫌だね。こっちはそちより複雑なんだ」

まあ、それはね。何故か愛人に徹してる、あっちの姉さんたちの母親とかね。事件と関係ないのに食いつかれる可能性はあるわね。

こっちの姉さんがわたしを殺したことで、あっちの姉さんたちや

兄さんたちが、好奇の目に曝されては筋が通らない。いい迷惑だ、と言いたいらしい。姉さんはしばし無言だったが、ちゃんと伝わっていたようで、やがて溜め息を吐いた。

立ち上がる気配。背を向けたようだ。

「死んだら教えて」

「目を覚ましたら？」

「そんなことは知りたくないわ」

離れていく。ドアが開く。閉まる。

……嫌われてるのは知ってたけどさ。……兄さんまで。妹だ、って言ったじゃないの。

ドアが閉まる。って、さっき閉まったばかりじゃ。いつの間にまた開いたんだ。

気配が近づく。やや急ぎ足に。

「明日香」

兄が身をかがめて、顔を覗き込んだようだ。

「早く起きろ。早く帰ってこい」

焦りがある。いつになく。

「あいつが出入りできる場所は危険だ」

……ああ。そういう、こと？

要するに、合わせてただけだって。変にかばって刺激して、姉さんが何かするといけないからって。何をするのかはともかく。

ベタだとか思っただめんなさい。ベタ歓迎。ベタ万歳。姉さんたちには渡したくないからでも何でもいい。わたしたちは兄妹よね。一緒に暮らしてきたのよね。

きっと、帰るわ。わたしたちの家に。

＊ ＊ ＊

目を開けると友人がいて、今はまずいよ、と苦笑した。
「親きょうだいが取っ替え引っ替え来てるっていうのに」

「……最初が、それ？」

自分がいるときに目覚めてほしくないなら来なければいいのに。
ほうっ、と息を吐く。手を握り、ほどく。足を動かしてみる。…
…どこも、千切れていない。

「君はね。交通事故で頭を打って意識不明で二十日間、しかも事故に遭った場所が場所」

「場所……」

「お姉さんたちに会いに行ったらろう？」

あー……姉さんたちに会おうとしたんでもなければ、わたしがあの辺に行く理由がないのか。

「周りが動揺するわけだよ。複雑な家に生まれた自覚ある？」

複雑な家。確かに。

徐々に頭がはつきりとして、事態が把握できてきた。そうね、動揺するわけだ。父さん母さんも、兄さんたちも姉さんたちも、ひよつとしたら向こうの姉さんだって。

「……どんな風だったの？ みんな」

「話すと長いよ」

「話して。誰がいるときに目を覚ますか決める」

友人は笑った。

何よ。長い話をする用意があるくせに。

「なら、目、閉じてな。いつ誰が来るかわからないから」

忠告に従う。考えるように腕を組む気配。

「親御さんのことから行こうか」

声をする。

……あれ。既視感？ 違うかな。……既聴感？ いや、そういう問題じゃなくて。

「お兄さんから聞いたんだけど」

駆けつけた両親が必死になって、意識の戻らないわたしの名を呼んでいたときのことを友人は話した。当然のようで、貴重だ。二人が同じように案じ、同じように悲しめるのはわたしだけなのだから。

「……貴重でも、当然ね」

目を閉じたまま、わたしは呟いた。
気になるのは、それよりも。

（後書き）

連作として「牙」「着信拒否」「誰が為」を掲載しています。併せてお読みいただけると嬉しいですよ。
（2011／7／24追記）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2696p/>

voice

2011年7月25日03時34分発行